

<2025年度 abt成果報告会>

「核燃料サイクル計画」と「次世代
原子炉開発」の問題点を解説し、政
策変更を求める動画シリーズの制作



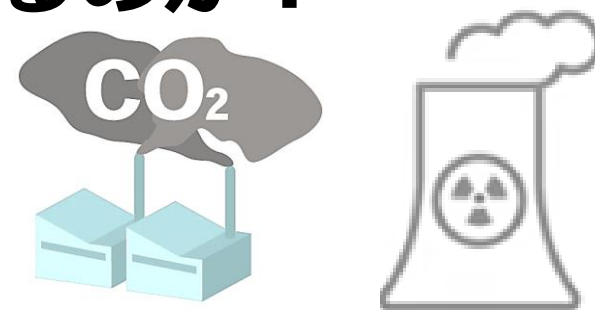
新外交イニシアティ
ブ

本企画の背景

■ 世界で進む「エネルギー大転換」、取り残される日本

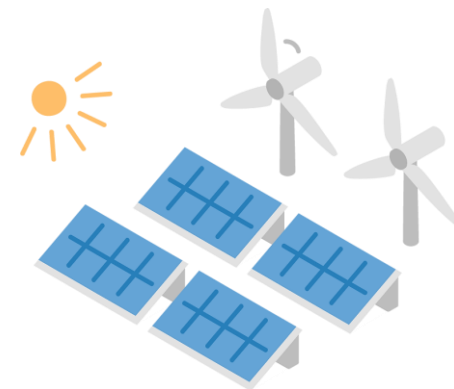
▶ 何が、自然エネルギーへの移行を妨げているのか？

- ・ **原子力と化石燃料**への拘泥



▶ 政府と大手電力によるPR活動にどう対抗し、「脱原発・脱化石燃料」への支持を広げていくか？

- ・ 分かりやすい**短編動画**の制作
- ・ エネルギー政策の変更を求める**政策提言**
- ・ これらをアピールするための**イベント**



短編動画の制作

■ 短編動画シリーズ 全10回

▶ 手軽さ

各回、正味約6分

▶ 親しみやすさ

“青い象”の「すかいちゃん」とND研究員の掛け合い

▶ 分かりやすさ

イラストや図表を使いながら、平易な表現で語る

「内容は高度なのに、分かりやすい」（視聴者の感想）



<フォーカス>

- ▶ **経済合理性と実現可能性に乏しい「核燃料サイクル計画」**
六ヶ所再処理工場/プルトニウム/中間貯蔵/核廃棄物
- ▶ **原子力発電・原子力産業延命のための「次世代革新炉開発」**
- ▶ **輸入頼みの「化石燃料依存」**
石炭火力/天然ガス/化石燃料延命策（CCS、アンモニア混焼など）
- ▶ **「エネルギー転換」**
エネルギーの選択を超え、どんな未来を描き、選び取るのか

2025年10月から順次公開、26年4月に完結

英・セラフィールド再処理工場



- ▶ 2018年閉鎖
- ▶ プルトニウムは“ごみ”として埋設廃棄
- ▶ 残されたのは膨大な量の核廃棄物と放射能汚染

ND6 NEW EXPERIENCES AND EXPLORATIONS プルトニウムは資源? ごみ?

ホワイト・エレファント (白い象)



使い道がないのに維持費や処分費が高くつく厄介物
「無用の長物」

つまり「無用の長物」っていう意味なんだ



イベント①

■ 2025年10月 オンライン座談会／動画公開イベント 「エネルギー転換」のアウトリーチ戦略を語り合う —硬直化した政策を変えるには—



<パネリスト>

大島堅一
(龍谷大学教授、原子力市民委員会座長)

津田大介
(ジャーナリスト、メディア・アクティビスト)

深草亜悠美
(認定NPO法人 FoEJapan事務局長)

*** 約130名がオンライン参加**

政策提言

■ 2026年4月 政策提言(日本語/英語) 発表

六ヶ所再処理工場の妥当性を問い直す —再検証と開かれた議論を求める—

<要旨>

- ▶ **偽りの「竣工」**は認められない
- ▶ 確実性に乏しいプルトニウム利用計画
- ▶ 経済合理性のないプルサーマル
- ▶ 地震規模の過小評価と危惧される耐震性
- ▶ 膨らみ続ける再処理コスト

凍結して再検証、市民参加による議論

六ヶ所再処理工場の妥当性を問い直す —再検証と開かれた議論を求める—

偽りの「竣工」は認められない
青森県六ヶ所村に日本原電が建設中の六ヶ所再処理工場は、着工から30年以上が過ぎてもなお、未だ完成に至っていない。最大のネックは「死の灰」(核分裂生成物)が溜り込んだ高レベル廃液の固化である。高レベル廃液はさまざまな放射線と熱を発生しており、液状のままでは衝撃に弱く、爆発の恐れもあることから、なるべく早く固める必要がある。竣工延期が繰り返されてきた一因は、この工程がうまくいかないことにある。

このままではいつまで経っても「竣工」の看板を掲げられないからか、日本原電は昨年12月、実際の廃液を用いた固化試験は「竣工後に実施する」と表明した。そうすることで26年度中(27年3月まで)に名ばかりの「竣工」へこぎつけようとしている。

しかし、このような状態で運転を開始しても、固化が順調に進まなければ、ほどなくして廃液タンクは満杯となり、工場のアインを停止しなければならなくなるだろう。再処理とは、使用済み核燃料を化学処理してプルトニウムとウランを取り出し、そのあとに残る高レベル廃液を固化するまでの一連の作業を指す。固化は再処理の重要な工程であり、この工程が確立しなければ、六ヶ所再処理工場は機能しない。そもそも「先進国・日本」で高レベル廃液を液状のまま保管し続けるのは、極めて危険である。

固化試験を後回しにして「竣工」と偽るのは、安全軽視であるだけでなく、再処理工場を潤う高レベル廃液の処理も合理的に欠く。再処理工場の運営にあたる原子力規制委員会は、このような危険を認めてはならない。

■ 確実性に乏しいプルトニウム利用計画
日本は利用北が確実になっていないプルトニウムを、国内外に45トン近く保有している(2024年末現在)。これは核爆弾5500発以上に相当することから、アメリカをはじめ世界から問題視されてきた。

日本は原子力開発の初期から「核燃料サイクル」を国策としていた。「核燃料サイクル」は、再処理で取り出したプルトニウムを高濃度増殖炉で「増殖」させ、それを再び高速増殖炉で利用するというサイクルを繰り返すことで、はじめて意味をもつ。しかし、プルトニウム利用の“本命”だった高速増殖炉「もんじゅ」は1995年、ナリウム火災事故を起して使えなくなった。この時点で「核燃料サイクル」は実質的に破綻したと言えよう。

政府はそれを取り替えるため、一時的な原発(軽水炉)でウラン・プルトニウム混合燃料(MOX)燃料を使うプルサーマルを、プルトニウム利用の主軸に押し替えた。しかし軽水炉は本来、ウラン燃料を使うように設計されているため、制御棒の効率が落ちるなど、軽水炉に備わっていた安全余裕が減少し、事故リスクを高める。

電気事業者は「2030年までに少なくとも12基」の軽水炉でプルサーマルを導入する計画だが、今日までに4基にとどまっている。そのうち現在、実際にプルサーマル発電を行っているのは2基のみで、プルトニウム使用量は合計で年約7トンと少量である。プルトニウム消費の額である「フルMOX」(全炉心にMOX燃料を使う)大間原発も、竣工の目途が立っていない。また、破綻した高速増殖炉に代えて、同じくプルトニウムを燃料に使う「高速炉」の実証炉が2040年代の運転開始を目指して開発されているが、商用レベルでの社会実装がいつになるのか、不透明である。

イベント②

■ 2026年4月 ND政策提言発表シンポジウム

「六ヶ所再処理工場の妥当性を問い直す」



<パネリスト>

- ・ 鈴木達治郎
(元・原子力委員会委員長代理、長崎大学客員教授)
- ・ 海渡雄一
(弁護士、核燃料サイクル阻止1万人訴訟弁護団)
- ・ 松久保肇
(NPO法人原子力資料情報室共同代表・事務局長)

* 会場参加、約80名
オンライン参加、約100名

* 青森をはじめ各地から参加
地方紙を含むメディア多数参加

■ 固化試験を後回し？

- ▶ 日本原燃は高レベル廃液の固化技術を確立できていない
 - ・ 液状のままでは超危険、爆発の恐れ、なるべく早く固化
 - ・ 固化できないとタンクがほどなくして満杯になり運転停止
 - ・ 操業開始が27回も延期されてきた主要因

▶ 2025年12月14日

日本原燃、高レベル廃液の固化試験は「竣工後に実施」

▶ 2026年5月20日

原子力規制委員会、容認



短編動画や政策提言を活用、偽りの「竣工」を止める

実施の成果と学び

■ 短編動画

- ▶ 問題を伝えるツールとしてアウトリーチに活用
- ▶ 手軽に学べる“教材”としての利用

■ 政策提言（日英）

- ▶ 良い反応→提言を基に、次のステップへ
- ▶ 六ヶ所再処理工場の最新情報を海外へ伝える

■ 学び：動画の再生回数を伸ばすには

- YouTubeのアルゴリズムを意識した動画制作、投稿
- 動画視聴の分析、今後に活かす

動画制作にご協力いただいた皆様（ここに名前を挙げていない方々を含め）に感謝。

制作：新外交イニシアティブ(ND)

編集：Owl's Film Factory

協力：原子力資料情報室、上関の自然を守る会、グリーン・アクション
飯田哲也、末田一秀、山田清彦、深草亜悠美(FoE Japan)
明日香寿川、Mycle Schneider Consulting

※この企画は一般社団法人アクト・ビヨンド・トラストの助成を受けています。

©2025 New Diplomacy Initiative

Abtの皆さま

ご支援とご助力、ありがとうございました。

